

優しさは人のために使うもの

(原文)

バトバートル・アディヤマー (18 歳)

石川県

日本航空高等学校石川

優しさは、わたしたちが身近な周りの人びとに愛情を持つことから始まると思います。なぜなら、人を手伝い面倒を見ることは、その人を気にかけて、何とかしてあげたいという気持ちが働くからです。

この世の中のすべてのいいことの基礎は愛です。優しさは人を愛することによって、はじめてあらわれるものです。どんな人にでも優しい気持ちがあるとわたしは思います。お金持ちや貧乏にかかわらず、性別や年齢に関係なくです。なぜならわたしたちはこの世に人として生活して、さまざまな人と係わる以上、優しさが必要であることを経験から知っているからです。わたしは重いハンディキャップのある人が、道端の物乞いにお金を寄付している姿を見たことがあります。これを優しさと言わずに、何と言えるでしょうか。優しさは決してお金で買うことができません。

それでも優しさを決しておおげさに扱う必要はありません。ごく普通の当たり前のことですから。誰かにいいことをしたり、言ったりするささいなことも、ひとつの優しさです。なかには自分の優しさに気づかないまま、優しさを自然に発揮できることがあります。

これはわたしが子供のころのエピソードです。家族はいつもわたしに、ふだんからできるだけ人を助けて、面倒を見てあげなさいと言っていました。わたしはまだ幼かったので、それを十分理解することができませんでした。ある日、家の近くの公園で遊んでいたとき、ベンチに座って、わたしたち子どもを眺めているお年寄りの中に、とても疲れて、深刻に考え事をしている一人のおばあさんがいることに気づきました。服は少し汚れていて、ズボンの膝につぎはぎがしてありました。そしておばあさんが立ち上がろうとしたとき、杖を突いて歩くのもとても大変そうでした。そこで、わたしはおばあさんに走り寄って、その腕をもつと、家まで送ることにしました。聞くと、昔、ご主人がなくなって、子どもがいないまま、一人ぼっちで過ごしているということでした。次の日、また同じ公園に遊びに行ったところ、そのおばあさんはいませんでした。わたしは少し心配になりました。そして牛乳を買っておばあさんの家に持っていきました。少し怖かったけれど、家の中に入ると、具合を悪くしたおばあちゃんがありました。わたしはすぐに家族を呼んで、病院に連れて行ってあげました。それから、1年後、家族で食事をしていると、わたしに一通の手紙が届きました。それはわたしが初めて人からもらった手紙でした。それはあのおばあちゃんから来たものだったのです。そこには、3か月くらい入院してから退院したこと、そして親切にしてくれたことへの感謝の言葉が書

かれていました。そのときわたしは、はじめて自分がやったことが正しいことで、人のためになったことを知りました。

いま考えると、見ず知らずの人に手をさしのべたというほんの小さな経験が、もしかしたら、人の命を救う大きなおこないにつながったのかもわかりません。わたしは着ている服や見た目判断せず、心のままに人を助けることが必要だということを知りました。

しかし、もしかしたら同じような場面でも、なかには面倒だと思ったり、知らない人と関わるのは怖いと思ったり、そして他人のことは自分と関係ないと思ったりする人がいるかもしれません。それは自分の優しさに気づかず、それを人のために使うことができずにいるだけなのです。そんなもったいないことがあるでしょうか。

子どもは両親と家庭からものごとを大きく学ぶので、そこでの教えや良い影響がとても大切だと思います。子どもなら、素直に親の言うことを聞くからです。わたしが家族の教えに自然としたがったように。誰でも愛している人がいると思うので、その人に語りかけるように、自分の優しさを人のために使うチャンスを逃さないことが、わたしたちの世界をよりよくするために必要なのではないのでしょうか。